

土族民俗村の出現——中国青海省「その2」

庄司博史（「ようじひろし」）民族社会研究部

一九

九九年晩秋、私は土族のA村をふたたび訪れた。六年前調査の途中、思いがけない大歓待を受けた村である。今回は翌年に計画していた民族誌映画撮影の下準備をかねての突然の訪問であった。以前うけた村民あげてのもてなしと、土族にしては派手で明るい歌と踊りが忘れられず、まさきに撮影候補にあげていた。

歓待の立役者であった老人はすでに三年前亡くなっていたが、招待のきっかけをつくってくれた青年やその仲間の驚きとよろこびは相当のものであった。あつという間に集まった人びとから意外なことを耳にした。いまやこの村は互助県随一の観光村として大発展したというのだ。夏には外国人もふくめ三万人もの観光客が土族の



村へ通ずる道にかがけられた横断幕「小庄民俗接待村」



観光客がやってくる道にみやげ物売りがとりかこむ

歌や踊りの見物にやってくる。おかげで、周囲の村には及びもつかないほど潤ったという。例の青年の家の一室は「きれいな」とのえられ、テレビでみた都会の家をまねたらしく、レースのダブルベッドのそばには赤いフッシュホン電話が回線のひかれるのを待っていた。

北京から空路二時間に短縮されたとはいえ、青海はチベット人やモンゴル人、おまけに珍しい土族などの住む異国情緒いっぴいのところである。省都にもっとも近いこの土族村で純朴な農民の歌や踊りにふれられるとあつては、観光業者も放つてはおかない。中国人だけではない、アメリカ人もカナダ人も、そして日本人もやってくるという。

何より驚いたのは、それが私の功績になつていったことである。六年前私が彼らを写真にとりビデオにおさめてかえった翌年から、世界中の人びとが訪れ始めたというのだ。功労者として像を立てることさえ考えたことまじめな顔でいう。おかげで、翌年の撮影には全面協力の確約は得たものの、半信半疑のまま、秋の収穫にいそむる村をあににした。

翌年夏、撮影のため互助県を訪れた私は、スタブと真つ先にその村におもむいた。車が通れる幅に広げられたかつてのあぜ道には「小庄民俗接待村」という横断幕がかかけられ、広場に到着するやいなや、みやげ物の帯飾りなどを手

にした女性や子どもたちがとびだしてくる。まもなくスピーカーから安昭の歌がながれだし、背広をきた責任者らしい男性があらわれた。西寧市の役人だったが、この村で観光客の受け入れを仕切っているらしい。差し出された名刺のうらはには、受け入れ人数、歌と踊りの演目数、食事の等級などの値段表がある。私の旧友たちは、愛想こそよかったものの、家ごとに観光団体を受け入れはじめたまとなつては、客をめぐるライバルどうしであった。

結局ここではたいして撮影はしなかった。派手なだけで簡素化された衣装、日に何度とくりかえされる踊りに、もはや情熱は感じられなかった。別れぎわ、観光バスが到着した。われ先にもみやげ物をもつてむらがる村民と距離をたもととする中国人観光客。観光地では見なれた風景がそこにはあった。

日本にもどりウェブサイトで偶然、観光で発展する土族村A村の記事をみつけた。貧しかった村が、いまでは年取の半分以上を観光から得ているという。人によつては七五〇〇人も観光客を受け入れ純益六万円（約八〇万円）を得る者もいるとある。例の青年のことだ。初めて受け入れた日本人に気に入られたことがきっかけとなった、ともある。件の話はどうやら本当だったようだ。しかし、私の像を立てる話は残念ながらいまだ聞こえてこない。